

# 皇帝とローマの和解

## セネカにおける神君の理念

### Reconciliation Between the Emperor and Rome Seneca's Ideal of the Divine Ruler

中西 捷渡 (広島大学)

Katsuto Nakanishi (Hiroshima University)

#### はじめに

本稿では、ルキウス・アンナエウス・セネカの君主論を、『アポコロキュントーシス』と『寛恕について』を中心として再構成していく。『アポコロキュントーシス』は、ネロの治世初年(54年)にセネカが執筆した、先帝クラウディウスの神格化を批判する風刺文である<sup>①</sup>。そのタイトルは「ひょうたんになること」を意味しており、「apotheosis(皇帝の神格化)」をもじった非常に風刺的なものである。内容としても、先の皇帝クラウディウスが死後神格化されて昇天するが、神としての資格を疑われ、神々の裁判において、先達で神格化されたアウグストゥスから弾劾され、地獄に落ちるといふ、非常に攻撃的な性格を持っている。他方、『寛恕について』は、『アポコロキュントーシス』と同年の54年、ないしは翌55年に執筆されたネロへの訓戒の書である。ネロを宥めすかして寛恕の重要性と帝王学を説き、アウグストゥスの先例を引くことでそれを肉付けし、続いてその定義に着手したところで現存部分は断絶する。以上紹介したように、両著作は相次いで執筆され、しかも主題としても皇帝の神格化や帝王学といった非常に近いものを扱っている。それゆえ、この両著作を繋げて読むことでセネカが構想した理想的な政体の姿を取り出すことが出来るのではないかと思われる。

そこで、本稿ではまず、これらの異質な著作が単なるおざなりの追従ではなく、政治的な意図を持っていたことを手短かに示唆する。続く諸節では、これらをイデオロギーとして読むための筋道を付けていく。まず、『ポリュビウス宛慰めの書』『アポコロキュントーシス』を中心に暗君クラウディウスとアウグストゥスの対比を確認したのち、『アポコロキュントーシス』『寛恕について』においてネロが新たな神君として紹介されることを示す。つづいて、『寛恕について』をストア哲学を念頭に読み解きながら、セネカが神君の名の下にストア派的な賢者を据えようとしていることを指摘する。以上を通じて、セネカが太陽の化身ネロというネロ政権の公式のプロパガンダを推進する裏で、皇帝像をストア的賢者へと変質させようとしたことを指摘する。

#### セネカの著作の政治性

セネカが属する後期ストア派は、伝統的な解釈によれば、個人主義的傾向が強く、活動的生よりも「閑暇(otium)」における観想の生への志向に彩られた思索を展開したとされている。たとえば、ヘーゲルの解釈では、ストア派の哲学は原理を示し得ても現実との接点を欠いているため、実社会に対して消極的な態度をもたらし、内心と抽象的な共同体に逃避させるものとされる<sup>②</sup>。また、ツェラーも倫理学の関心が個々の国家から人類全体へと移行したことで道徳哲学と政治哲学が分離したと解釈する<sup>③</sup>。セネカ自身も、著作を一読した限りでは、この傾向を色濃く備えている。例えば、『生の短さについて』では、公務や気晴らしによって人生を浪費す

るよりも哲学に励むことが推奨されており、閑暇 (otium) と公務 (negotium) は対立的に語られる (BV 3.2, 4.1, 11-14)。また、『閑暇について』の冒頭においても、静謐な閑居こそが独り哲学的思弁に沈潜し徳を涵養する必要条件であるとも語られている (Ot. 1.1-3)。ここから、セネカ思想全体においても、ある種の政治的デタッチメントの傾向が期待される。

しかし、セネカはまさにその『閑暇について』で続けて、この閑居の思想がストア的ではないという想定質問に弁明を加えている。ストア派の教説によれば、人は公共精神をもって公益のために最後まで尽力すべきであるとされているため、セネカの閑居の勧めは両立しないのではないか (Ot. 1.4) ? この疑問に対し、セネカは三つの点からこの矛盾の解消に取り組む。まず、閑居は若年期から取り入れることも出来れば、老境に差し掛かって閑居に向かうことも出来るのであり、後者においては公務に取り組むことと閑居を求めることは両立する (Ot. 2)。次に、ストア派は社会へのエンゲージメントを推奨する際に「特段の理由がない限り」という留保を設けている。たとえば、心身の不調やその奉仕が明らかに無益である場合には、閑居に向かうことは正当化される (Ot. 3)。第三に、奉仕には、地上の共同体の構成員としてその共同体に対して行うものと、宇宙の構成員 (cosmopolites) として行う宇宙への奉仕がある (Ot. 4)。そして、閑居し哲学に励むということは、まさにこの宇宙への奉仕に他ならない。それゆえ、閑居を求めるということは、必ずしも地上の国家や政治活動からのデタッチメントを意味しないのである。そして、セネカは皇帝の師傅という最高の奉仕環境にあるのであり、若く経験不足の皇帝は実に御しやすいであろう。それゆえ、セネカが政治から距離を取ることに、ストア派の教説によれば、十分な理由がなく、彼は政治家と哲学者という二足のわらじを履くことにより、地上と天上の二つの国家に同時に奉仕する生を選んだのである。

以上のことから、セネカの著作が政治的性格を帯びることに不思議はない。『アポコロキュントーシス』は、ネロの母である皇后アグリッピナによる招聘とクラウディウスの崩御により不遇の時代が完全に終わりを告げた時に書かれたのであり、『寛恕について』はネロが帝位に即き、その師傅として絶大な権勢を手に入れたときに書かれた。この時期のセネカの政治家としての務めは、ネロの治世を善導すること、そしてそれを通じてローマの秩序を回復することであっただろう<sup>4)</sup>。それゆえ、セネカはまず、ネロの治世を盤石とする必要があり、そのためには、帝政がローマに深く根を下ろすことを可能とする物語が必要であった。このような事情から、この両著作においては、晩年とは異なり、哲学者としてのみならず、政治家としての利害関心をも満たす形で理論が組み立てられているのである。

## 暗君クラウディウスと神君アウグストゥス

帝政を正当化するための物語には、皇帝の権威の説明が織り込まれていなければならない。そこで重要な役割を担うのが、皇帝の死後の神格化 (consecratio / apotheosis) という帝政ローマの儀礼である。ガイウス・ユリウス・カエサルに淵源を持つこの儀礼<sup>5)</sup>は、皇帝の遺徳を公的に顕彰することを元老院と民会で決議し、神殿を建立し、専門の神官団の結成と祭礼の設定といった一連の要素からなるもので、元老院による先帝の治世の総括としての性格をもち、著名な「記録抹消決議 (damnatio memoriae)」と対になるものと解することが出来る<sup>6)</sup>。それゆえ、皇帝の神格化とは、皇帝に対するローマの元老院と市民<sup>7)</sup>の承認を意味するものであり、重要な政治的権威の源泉となる。

しかし、この決議は通常は死後に発議されるものであり、在位中のネロに適用するには問題がある。実際、カエサルが生前に自己の神格化を要求した際には、法外な要求と見なされ、その暗殺を後押しすることになったとも言われている<sup>8)</sup>。ローマ人にとって、ギリシア人やアジア人のするように影響力のある人物を現人神として扱う<sup>9)</sup>ことは、きわめて異質な習慣であり、

運用には慎重を期さねばならなかった。たとえば、皇帝権の実質を完成させたアウグストゥスでさえ、カエサル先例を踏まえて、元老院との関係への配慮から、生前は帝国東方部からの神格化の申し出を謝絶しており、その神格化は次代のティベリウス帝による指示を待たねばならなかった<sup>(10)</sup>。

ネロの治世までにこの神格化が適用されたのは、独裁官カエサル、初代アウグストゥス、第4代クラウディウスの3名であり、第2代ティベリウスと第3代カリグラは神格化されていない。この状況からは、神格化はカエサルやアウグストゥスと同列に扱われる非常な栄誉であり、重要な権威の源泉となることが窺える。

しかし、ここで一つ問題がある。これまで、神格化された皇帝は、異論の余地のないアウグストゥスを除けば、クラウディウスのみである。しかし、なぜクラウディウスはティベリウスとカリグラに認められなかった栄誉、カエサルやアウグストゥスと並び称される栄誉に値するのだろうか。この点を、おそらく私怨も手伝って、強く問題視したのがセネカである。セネカの考えによれば、クラウディウスはアウグストゥスに並ぶべくもない暗君であり、クラウディウスの神格化はアウグストゥスの神性と権威に対する冒瀆的な愚挙なのである。

クラウディウスの治世に関するセネカの言及を検討してみよう。まず、クラウディウスの在位中、文人追放政策の一環でコルシカ島へ追放されている最中に執筆された『ポリュビウスに寄せる慰めの書』のなかで、クラウディウスの治世に言及している。

先帝の狂気が打ち砕いたものをすべて旧に復し […] ゲルマーニアを平定し、ブリタンニアの扉を開き、 […] 新たな凱旋式をも挙行されんことを。それを眺める観衆の一人にこの私もなれることは、あの方の徳性の第一の座を占める寛恕が約束してくれています。事実、あの方が私を排斥されたのは、 […] いや、あの方は私を排斥さえされなかったのであり、運命に打ちのめされ、転落しようとしている私を支え、 […] 穏やかに地に立たせてくれたのです。 […] あの方には、私の事件がどのようなものか、望まれるとおりのものと裁断していただければよいのです。(Polyb. 13.1-3)

あの方が世界を統率している限り、あの方が帝国の安寧を守るに武器をもってするよりは恩恵をもってするほうがまさっていることを示しておられるかぎり […]。臣民すべてに対するあの方のあれほどの慈悲、あれほどの恩愛 […]。あの方がアウグストゥスと功業では比肩され、聖寿では凌駕されんことを。 […] あの方の一統があの方に天界の資格を求め、あの方を神となす日が延び延びになり、ついにその日を知るのがわれわれの孫の代とならんことを。(Polyb. 12.3-5)

この著作は、クラウディウスの側近で文書係を務めていたポリュビウス宛てに、その兄の死を機縁として『慰めの書』として送られたものである。この文言を素直に受け取ると、クラウディウスは臣民への慈愛と寛恕の精神に満ちた名君であり、先帝カリグラの狂気によって破壊された秩序の回復、および、目下の敵であるゲルマニアとブリタンニアの平定を成し遂げるはずである。そして、それが成就した暁には、神格化され、アウグストゥスと並び称されるに値する。一見すると、これはクラウディウスへの惜しげもない賛辞であり、追放解除を狙った一手としての性格も持つこの文書のなかにそれを盛り込むのは不思議なことではない。しかし、この文言は「私を排斥さえされなかった」というあからさまな事実誤認が示唆するように、当然ながら痛烈な皮肉である。

このことは、クラウディウスの死後に書かれた『アポコロキュントーシス』と対にすること

で明白になる。この著作でセネカは、まったくストア派らしくない悪意に満ちた筆致で容赦なくクラウディウスの所業を断罪する。ここでは、クラウディウス評の中心をなす神々の議会におけるアウグストゥスの弾劾演説を挙げたい。

わたしが陸に海に平和を生み出したのは、こんなことのためだったのか。私が内乱を鎮定して得たものと言え、私が都に法の礎を与え、都を建造物で飾り立てて得たものといえ、ば——それをどう言い表すべきか、[…]  
「私は自分の権力を恥じる」[…]  
この男は、[…]  
諸君には蠅一匹追っ払えない人間に見えようとも、その実、犬がうんこ座りするのと同じくらい、いとも簡単に人間を殺していたのだ。[…]  
諸君の目の前にいる男は、長年にわたり私の名を隠れ蓑にして、私に恩を仇で返すこのような仕打ちをし続けたのである[…]  
言ってみろ、神君クラウディウスめ、お前が殺した男子も女子も、一人のこらず、どうしてお前は審理もせず、弁明も聞かずに断罪したのだ。[…]  
この男は、ガイウス・カエサル（・カリグラ）が死んでも、そのあとを追いつけてやまなかった。[…]  
諸君はこのような男を神にしようというのか。（Apoc. 10.2-11.3）

ここから読み取れるように、クラウディウスの行動は神君アウグストゥスの事績を踏みにじるものである。アウグストゥスは恩恵を通じて帝国の安寧を守り、寛恕をもって敵をも許し、矯正して然るべき地位に落ち着いたのに対し、クラウディウスは皇帝裁判権<sup>(11)</sup>を乱用して法の秩序を破壊し、無情な沙汰によっておびたしい数の犠牲者を生んだ。また実際、その犠牲者を「糞（stercus）」と呼んでいることから覗えるように、寛恕とは真逆の悪徳がクラウディウスには備わっていたことになる（apoc. 7.5）。かくして、クラウディウスは、ガリア（Gallia）生まれの人間（ガリア人=Galli）に相応しく、「糞山の上の雄鶏（gallus in suo sterquilino）」（apoc. 7.3）となって、自身のみならず「この世のすべて糞塗れにし（omnia concacavit）」（apoc. 4.3）、ローマを劫掠したのである（apoc. 6.1）<sup>(12)</sup>。そのようなクラウディウスの治世は、アウグストゥスをもって、自らの業績を恥じさせるほどに劣悪なものであった。

このことを踏まえると、『ポリュビウス宛慰めの書』において述べられる追従を文字通りの賛辞として受け取るべきは、神君たる人物である。他方、クラウディウスが受けるべきは、これらをすべて反転させた非難でなければならない。これが、セネカによるクラウディウスの評価なのである。それゆえ、クラウディウスがアウグストゥスと並び称されることをセネカが非難するのも頷ける。アウグストゥスはネロが継承する帝政の礎であり、皇帝の原型として比類なき権威を持たねばならない。そこに、クラウディウスのような皇統の汚点が連なることは、冒瀆的な事態である。神君アウグストゥスは、ネロの模範となり、理想的君主への成熟を促すべき人物でなければならないのである。

## 太陽の化身ネロ

帝政を樹立した伝説的な君主であるアウグストゥスに並び称されることは、それだけで一つの偉業であるが、ネロはまさにその榮譽を手にするはずの新時代の君主である。そのことは『アポコロキュントーシス』で既に示されている。

彼女[女神クロトー]はそう言うと、醜悪な紡錘でくるくる糸を巻き取り、／帝位にあった鈍重な男の寿命をぷつぷつ断ち切った。／一方、ラケシスは、[…]  
／雪白の羊毛から白く輝く糸を繕り、／吉祥の手で巧みに紡ぐと、紡ぎ出された糸は／たちまちにして新たな色に染まった。[…]  
／ありふれた毛糸が変じて高価な金となり、／美しいその金糸の上に黄金

の世紀が次々と紡ぎ出されていく。／幾代も続くその世紀に限りはない。[…]／日の神（ポイボス）がそばに立ち、歌で加勢しては、来たるべき時代を喜び[…]／ポイボスのその歌に、姉妹たちはうっとり聞き惚れ、[…]／姉妹らが兄神の豎琴と歌とをほめそやすうちに、／[…]その労作は常人の寿命をはるかに凌駕した。ポイボスは言った、「パルカたちよ、／その糸からかけらも取り去ってはならぬ。常人の寿命を凌がせるのだ、／顔立ちも、優美さも私似で、／歌ぶりも声も私に引けをとらぬあの者には。あの者は疲弊した臣民に／幸多き世々をもたらし、法の沈黙を打破しよう。／これを喩えれば、[…]／闇を裂き、[…]大地を下に見はるかしつつ、[…]／車軸を揺るがしながら起点より日輪を御す、光輝く太陽神（ソール）のよう。／そのように、今しもカエサルは立ち現れ、そのように、今にもローマは／ネローを仰き見よう。明るく輝くその顔は温和な光を湛え、／美しいそのうなじは乱れかかる巻き髪に照り映える」。 (Apoc. 4.1)

クラウディウス臨終の場面で挿入される韻文では、ネロを太陽にたとえながら、悪政の終わりとネロによる黄金時代の幕開けを言祝いでいる。ネロは目立った業績があるわけではないが、帝位に即けばたちまち頭角を現し、ローマに黄金時代をもたらす。ネロは運命と太陽神に祝福された存在であり、自らもまた太陽神のごとく高貴で美しく、法の秩序とクラウディウスの残した負の遺産を一掃し、ローマ中が仰ぎ見る名君となるであろう。いかにも新帝の即位に相応しい大仰な賛辞であるが、これもその場しのぎの単なる追従ではない。

まず、神君を太陽にたとえるというのは、セネカが一貫して使うモチーフである。『ポリュビウス宛慰めの書』の追従を再掲すると、

すでに久しくが未来死んでいる人類を癒やすのをあの方に許し、先帝の狂気が打ち砕いたものをすべて旧に復し、元に戻すのをあの方に許すがよい。願わくは、奈落に転落し、闇に沈んだ世界を再び照らしたこの太陽がとこしえに光り輝かんことを。 (Polyb. 13.1)

と言われている。また、『寛恕について』でも、ネロ＝太陽のモチーフが現れる。

あなたは、太陽と同じように、見られないでいることはできません。あなたは溢れるような光に囲まれていて、万人の視線がそこに向けられています。ご自分はただ「外へ出ていく」と思いでも、じつは「上へ昇っていく」のです。 (Clem. 1.8.4)

ここから、『アポコロキュントーシス』という特異な著作に挿入された戯作的な韻文とはいえ、何らかの一貫した意図を想定することが出来る。

そしてその意図は、ネロの趣味とアポロンにまつわる政治的文脈を踏まえることで一層明確になる。まず、ネロは自身をアポロンになぞらえることを好み、豎琴を弾き歌を歌う、劇に出演する、戦車競技に参加するなどの、尚武の伝統に満ちたローマを統治する皇帝としては異例の行動の数々を起こした。最高権力者たるネロの行動を規制できない以上、彼が皇帝として広く承認されるためには、この行動に何らかの文脈を与えて正当化しなければならない。そこで、このネロの非ローマ的文人趣味の守護神がアポロンであったことが天佑となる。なぜなら、ローマ政治史において、アポロンという神格にはアウグストゥスを彷彿とさせる重大な負荷が与えられていたからである。自らをアポロンになぞらえるという戦略は、第2回三頭政治崩壊後の混乱の中、東方に盤踞し自らをディオニュソスになぞらえたアントニウスに対してアウグストゥスが取った戦略でもあった<sup>(13)</sup>。このアポロンとディオニュソスの対決は、アポロン側の

勝利に終わり、ローマはアウグストゥスの覇権に服した。この故事から、この賛辞はネロの特性をよく踏まえるのみならず、アウグストゥスによる混沌の終熄を彷彿とさせるものである。それゆえ、この比喻を通じてアポロンを後ろ盾とすることにより、ネロの行動には、新時代のアポロン、アウグストゥスの再来として一定の正当化が与えられることになるだろう。

そしてさらに、ネロ＝アポロンというプロパガンダは、ネロ政権で一貫して用いられたモチーフでもある。後年のローマ大火ののちに造営された「黄金宮殿 (domus aurea)」の中心となる八角形の広間では、春分と秋分に太陽が皇帝の通用口を照らしだすという仕掛けが施されていたり<sup>(14)</sup>、ローマで行われた同盟国アルメニアのティリダテス王の戴冠式では、ポンペイウス劇場を改装して一面に金メッキを施し、晴天の下、戦車に乗ったネロが目も眩む光輝につつまれながら王冠を授けるという演出が行われたりもした<sup>(15)</sup>。これらのことを踏まえると、ネロ＝太陽の化身というシンボリズムはネロ政権の一貫したモチーフであり、神話的な手法を用いて皇帝と神性を結び付けようとしたと言える<sup>(16)</sup>。セネカは、いち早くこのモチーフを導入し、ネロの地位の盤石化に貢献したのである。

このようにしてネロは、アウグストゥスと並ぶべき新時代の神君と者とされた。ここまでは、セネカのプロパガンダにはギリシャ＝ローマの伝統的な神話モチーフしか用いられていなかった。しかし、いくらアウグストゥスに託けようと、従軍経験もない軟弱者と見られていたネロは、神話の力だけで尚武主義のローマ人を納得させることは出来なかった。そこで、セネカは新たな説得材料を用意する必要があった。それが、続く著作のタイトルにもある寛恕の徳である。次に見るとおり、セネカの描き出す神君は、この寛恕の概念を拠り所として、古代の素朴な神話宗教的な背景理論ではなく、ストア派的な背景理論に接続していく。

## 賢者としての神君

寛恕 (clementia) とは、キケロのプロデュースによりカエサル最大のアピールポイントとして利用された徳目であり、アウグストゥス以降もユリウス＝クラウディウス朝において主要な君徳として継承された<sup>(17)</sup>。たとえば、『大ピソに係る元老院決議』では、元老院が示す寛恕と正義と大度 (animi magnitudo) に関してはローマの父祖たちの中でアウグストゥスとティベリウスが主要な範例であり、慈愛 (humanitas) と節度 (moderatio) はティベリウスの意向を反映したものであると言われている (SCPP, 1.90-2; 100-1)。『寛恕について』のなかで、セネカはネロの資質の証左としてその寛恕の精神を称揚する。ネロは、クラウディウスとは違い、正当な処罰を下す際にも心を痛めるほどの慈愛に満ちた潔白の精神を持っている (Clem. 2.4) <sup>(18)</sup>。そしてこの天性の寛恕の精神こそ、ネロがすでにアウグストゥスを凌駕しているという一例なのである。なぜなら、アウグストゥスも晩年こそ寛恕を旨としたが、生来は激しやすく残虐な行為も厭わない質だったのであって、いかに寛恕を示せどもその手は血に塗れていたからである (Clem. 1.1.6; 1.11.1-2)。このように、セネカはネロの実績のなさを逆手にとって、まったく新しいタイプの神君を構想するのである。

ストア哲学との関係が明白に表れているのは第2巻の議論だが、神君の概念を説き明かすにあたり、まずは第1巻で手短に展開される皇帝論を検討しよう。

まず、冒頭で理想的皇帝の独白として次のように語られる。

すべての人間の中で、この私は、地上で神々の代わりを果たす者として賛同を得、選ばれているのか。そう、私は諸民族の生死を支配する者である。各人の運命と状況がどうなるのか、その決定は私の手中にある。運命がそれぞれの人間に何を授けようとしているのか、それは私の口を通して告げられる。私の答えにもとづいて、諸国民や諸都市は喜びの根拠

を押し量る。私の好意と愛顧がなければ、どの地域であれ栄えることはできない。[...] それらを裁定するのは私である。私はさまざまな事柄に対して、これほど大きな権限を持っているのである。(Clem. 1.1.2-3)

ローマ皇帝とは臣民と周辺諸民族に対し、絶対的な生殺与奪権を持つ者である。皇帝は地上における神々の代理人であり、皇帝の言葉は単なる人間の言葉ではなく、運命や神々の言葉なのである<sup>(19)</sup>。ここでは、「神々」という言葉こそ登場するが、『アポコロキュントーシス』で見られたような、ギリシア神話的な世界観はなりを潜め、神の代理人としての生殺与奪権はローマの地中海世界における覇権をいくらか誇張したものに見える<sup>(20)</sup>。ここで注目すべきは、ギリシアの現人神型の神格化のように皇帝自身が神なのではなく、皇帝は神の忠実な代弁者であるがゆえに神性と結びつくという巫覡としての神格化に代わっていることである。この神性概念を経由することで、皇帝の神性は後述するように更なる変容を見せる。

この点だけでも注目すべき変化だが、ひとまず皇帝論の検討を続けよう。神の代理人たる皇帝は、臣民に対してはどのような関係にあるのか。このことを、セネカは身体の比喻を用いて説明する。

身体は、そのすべてが心に仕えています。[...] それと同様に、一つの命を取り巻くあの巨大な群衆も、その精神によって支配され、その理性に従って動きます。(Clem. 1.3.5)

あなたがご自身の国家の心であり、国家があなたの身体であるとすれば、[...] あなたは他人を許すように見えますが、じつはご自分を許しているのです。それゆえ、咎めるべき市民たちでさえ、病んだ手足と同様に許さねばなりません。(Clem. 1.5.1)

国家は、支配者という頭と臣民という身体によって構成される一つの有機体である<sup>(21)</sup>。この一体を切り離すなら、君主は力を失い、群衆は統一を失って相互に牙を剥き、自滅していく (Clem. 1.1.1)。それゆえ、臣民は自らを犠牲としてでも君主を守るべきであり (Clem. 1.3.4)、君主も臣民を処罰する際には、自らの四肢を切断するのと同じだけ慎重かつ厳粛な態度で臨まねばならない。このように身体の比喻を導入することによって、ローマにとっての皇帝の必要性和、皇帝にとっての臣民の必要性が説かれる。国家とは拡張された一個の身体であり、皇帝とはその身体の魂なのである。このように位置づけられることで、皇帝における寛恕の効用も明らかになる。残酷と暴政とは自らの身体をいたずらに傷つける不合理な行いであり、寛恕の精神による善政は自らの身体を労り保全する理にかなった選択なのである。しかも、皇帝の寛恕と慈愛は自らの国家をも超えて、人類全体へと広がっていく。

真の寛恕とは、[...] 権力の頂点にあつては、心の節度を完全に保つことであり、人類をまるで自分自身のように抱擁し、愛することです (Clem. 1.11.2)。

すなわち、皇帝とは「神々の心を自分のものとして」(Clem. 1.5.7) 全世界を配慮し、神意の代弁者として至上の命令権を行使するものなのである。

以上見てきたように、全世界は究極的には皇帝を頂点として一つの有機体を構成する。そして、その皇帝は寛恕と慈愛をもって自らの身体たる全世界を統治する。これは一見するとキリスト教的な世界観に見えるが<sup>(22)</sup>、各所に施された仕掛けから、その背景理論はストア派であることが見て取れる。

まず、皇帝の配慮の拡張と帝国の魂という位置づけの実現には、ストア派のオイケイオーシスの理論が利用されている。オイケイオーシスとは、「自らに属するもの (οἰκεῖον) とする」という意味の語で、ストア派の道德性の発達理論の中核に位置する。オイケイオーシスはアイデンティティの変化の二重のプロセスである。一方では、自己の本質を生存や衝動のような魂の比較的低下機能から転じて理性という最高の機能と同定するようになる価値観変容のプロセス（内的オイケイオーシス）があり、他方では、道德的配慮の範囲が利己的なあり方から家族、国家を通じて最終的には世界全体にまで拡張する社会性発達のプロセス（社会的オイケイオーシス）がある。この二つは連動して進み、発達の極致である賢者の境涯に至るや、自らの命すら執着しない超然とした態度をもたらす。皇帝の配慮の拡張と帝国の理性への変容は、まさにこのオイケイオーシスによって実現されるのである。

次に、第二巻のセネカによる寛恕の定義を見ていこう。

寛恕とは、復讐する権限があるときに心を抑制すること、あるいは罰を決定するに際し、上位の者が下位の者に対して穏和な態度をとることです。[...] 寛恕とは、罰を科するに際して心が温情に傾くことであるとも言うことができます。しかし、次の定義は、真実に最も近いとはいえ、反論に遭うことでしょう。すなわち、寛恕とは当然科すべき罰をある程度軽減する自制であると言ったならば、それに対して、美德は誰に対しても果たすべきことを減らして行うことはないという抗議の声があがるでしょう。しかし、誰でも理解しているように、当然の科刑が決定される手前で立ち止まることが寛恕なのです。(Clem. 2.3.1-2)

セネカは寛恕の様々な側面を端的に言い表すために、5回にわたって定義している。一つ目の定義は「抑制 (temperantia)」である。第二と第三の定義は「穏和な態度 (lenitas)」第四の定義は「当然の罰をある程度軽減する自制 (moderatio aliquid ex merita ac debita poena remittens)」<sup>(23)</sup>、第五の定義は「引き返すこと (se flectit)」である。また、寛恕は最も慈悲深いという点で、何よりも人間に相応しい (humanior) 徳目でもある (Clem. 1.3.2) <sup>(24)</sup>。寛恕に対する悪徳としては「残酷さ」や「同情」が挙げられる (Clem. 2.4-5)。ここでは、アリストテレスにも見られる「穏和」や伝統的な枢要徳である「抑制」、さらには帝政における代表的君徳としての「慈愛」や「自制」など、様々な伝統に跨がる形で徳の語彙が用いられており、非常に複雑であるが、基本となるのは情念に囚われずロゴスに即した判断をすべきだとするストア派の理論である。

このように、寛恕が徳として定義されると、それを発揮する皇帝はやはり並の人間ではなく、賢者でなくてはならないということになる。なぜなら、ストア派における徳とは「自然に従うこと」、すなわち、個人の魂における思考としてのロゴスの運動が、宇宙全体のロゴスの運行を秩序づける摂理と完全に同調し、相似的な状態となっていることを指すため、賢者以外の人間は徳を持ち得ず、また、ロゴスに即した判断も偶然的にしか下すことができないからである。それゆえ、寛恕を発揮する神君とは賢者でなくてはならないのである。

こうして、神君が賢者であることが明らかになると、皇帝が代理人を務める神々の正体も明らかになる。要するに神君とは、宇宙全体の摂理を代表して地上の国を統治する賢者なのである<sup>(25)</sup>。『寛恕について』1巻冒頭で言われたように、皇帝は神意の代弁者であって、自然法としての摂理に則して地上の国家を統治する存在なのである。

## おわりに

以上見てきたように、セネカは皇帝を帝国という一つの有機体の頭に据える国家有機体説のイデオロギーを構想した。この理想国の理念は、一見するとネロへの追従と読めるが、セネカ



がネロを新時代の神君として祭り上げようとしていた事を考えると、より周到に組み立てられたものと読むべきである。

セネカは二通りの仕方でネロの神性を演出しようとしている。一方は、ローマの政治文化に則った、ネロ＝アポロン＝アウグストゥスという政権の公式のプロパガンダであり、『アポロキュントーシス』を中心に展開されたものである。他方は、『寛恕について』で展開された、国家有機体説とストア的賢者という二つの仕掛けを通した、摂理の代行者としての皇帝とその身体としての帝国というストア的神権政治の構想である。この二重の神格化理論は、国家の利害と対立したクラウディウスの負の遺産を解消し、皇帝と国家の和解を理論的に整備することに尽きるのではない。セネカは神話的神権付けから神学的権威付けへのすり替えを目論み、皇帝の地位を専制君主へと変貌させる理論を考案した。

もっとも、歴史が示すとおり、セネカの教育も諫言も功を奏さず、この目論見はネロ本人の嗜好によって退けられた。ネロの寛恕は長続きせず、他の資質から見ても神君とは似ても似つかぬ有様であった。かくして、セネカの工作は歴史的に見れば勇み足に終わった。しかし、セネカの政治神学は、エウセビオスによって完成される神の代理人としての皇帝という理念を先取りする点で、ローマの政治思想史において一定の意義を保つと言えるだろう。

※本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2132 の支援を受けたものです。

## 註

- (1) 大西 2006 : 458.
- (2) 長谷川 1992 : 245-7.
- (3) Zeller 1923:13.
- (4) たとえば、Grimal (1978) は、セネカの著作における沈黙にもかかわらず、積極的に歴史の実際に関わっていたことを指摘する (8)。これを踏まえて Cizek (1982) は、『アポロキュントーシス』と『寛恕について』をセネカが構想したネロ政権のイデオロギーを記した書物であり、一時はこの路線が奏功したものの、ネロの誇大妄想と東方趣味により退けられたと解釈している (104-12)。また、Griffin (1976) はセネカがストア派の枠組みを社会に実装しようとした可能性に触れつつ、絶対的支配者としての「王」たらんというネロの強烈的な欲求によって頓挫したことを指摘している (169-71)。セネカによるアプローチの成果の捉え方について、本稿もこの筋書きに従う。なお、Drinkwater (2019) はこれらの研究 (とりわけ Griffin の研究) を踏まえつつ、セネカはあくまで一廷臣として、政権内での利権の確保を第一として暗躍したのであり、政治的環境を変革しようという野心はなかったとして、イデオログとしての役割を否定しようとする (156-7)。しかし、利権の確保と政権の盤石化のための変革は両立しうることに加えて、セネカが元老院で主導的な立場にあり、ネロの演説を度々代筆したことを考えると、単なる廷臣というイメージに押し込めることには無理があるように思われる。
- (5) ローマ文化の文脈では、少なくともキケロが亡き娘を神格化したことに遡ることができる。Cf. Cole 2013: 1-2.
- (6) 弓削 1984: 305.
- (7) ローマの正式な国号はまさに *Senatus Populusque Romanus* である。
- (8) 弓削 1984: 274, 302-3.
- (9) ヘレニズム文化圏の君主には「エピパネース (ἐπιφανής)」の添え名を持つものが散見される。これはまさに「現人神」を意味しており、ギリシアおよび東方世界での神と偉人の関連付けの 1 パターンを示すものである。
- (10) 弓削 1984 : 278-9.

- (11) 皇帝裁判 (cognitio) とは、調書作成と裁判官による審理からなる従来の 2 段階の公判過程のうち調書作成を省略し、皇帝ないしは皇帝の指名する担当官が裁判官として直ちに審理を開く帝政期の新制度である。この一説を見る限り、クラウディウスは自ら裁判官を務める親裁を好んだようである。皇帝裁判の詳細は R fner (2016) を参照。
- (12) Nussbaum (2010) によれば、この「糞」はクラウディウスに関する重要なモチーフである。Nussbaum はこの嫌悪感を誘うモチーフとネロの魅力的な美貌のモチーフの対比に注目し、清浄なネロの治世への期待を高めるとともに、嫌悪感という悪感情を抱くことのないストア的賢者の境地を示唆するのがこの著作の戦略であると解釈している (210-2)。この路線に従えば、すでに『アポコロキュントーシス』においてネロとストア的賢者の間に連想を作り出す工作が始まっていると指摘できるかもしれない。しかし、Nussbaum の解釈の導出過程はアクロバティックであり、妥当性には疑問の余地がある。そこで、本稿では Nussbaum の指摘は『アポコロキュントーシス』のストア派的解釈の可能性を示唆するものとして受けとめるに留め、Champlin のネロ政権研究に従い、単なる神話のモチーフを用いたプロパガンダの一環として解釈する。皇帝とストア的賢者の連想については、クラウディウスがいかなる意味で神であるのかを尋ねるなかで、「その男がどうして、ウァッローの言うように「頭も包皮もない球体」でありえよう。そいつには何やらストア派の神に似たところがあるようだ、今、分かった。心もなければ頭もないからだ」(Apoc. 8.1) と言われている点が参考になる。Eden (1984) および Nussbaum (2010) を踏まえれば、「心 (cor)」は人間らしい心情を、「頭 (caput)」は具体的個人としてのあり方を指している (Eden 1984: 100)。クラウディウスは不合理な情念ならぬ人間的心情を欠き、宇宙的な高遠な視座ならぬ記憶力のゆえに実生活の経緯を蔑ろにしたという点で、悪い意味でストア派の神に似ているという指摘である。しかし、同時にセネカが共感するいま一つの学派であるエピクロス派の神も候補に挙げられており、皇帝＝ストア的賢者の理念を仄めかす典拠としてはそれほど強くない。
- (13) Zanker 1989: 45-6, 49-53.
- (14) Hannah, Magil & Parmieli 2016: 516-7, 520-2.
- (15) Dio 63.6; Champlin 2003: 126.
- (16) 同時代の詩人でありセネカの甥であるルカヌスも、セネカの『寛恕について』に遅れること 3～4 年にして 59 年の著作『内乱』の冒頭 (1.41-69) でネロ＝太陽神のモチーフを取り入れている。ここからは、このモチーフが、導入部分に組み込まれる程度には常套的なものとして知的階級に浸透していたことが覗える。
- (17) Griffin 2018: 574-6.
- (18) 『寛恕について』は、冒頭に述べたように、ネロに対して皇帝における寛恕の重要性とその本性を説く著作である。まず第 1 巻で導入として皇帝における寛恕の重要性が賛辞に織り込まれる形で述べられ、アウグストゥスをはじめローマの事例を取り上げる。続く第 2 巻では寛恕の本性についてのテクニカルな議論が期待されるが、現存部分では辛うじて寛恕の定義を示したところで途絶えている。この著作で寛恕や潔白が強調される理由の一つとして、当時ネロに対してライバルであるブリタンニクスを謀殺した疑いが向けられていたことが挙げられる。
- (19) Hammer (2014) はこの裁定 (jurisdiction) を鍵にセネカの政治哲学を読み解いている。Hammer の解釈によれば、実定法や道理に則った裁定と自然法に則った裁定を重ね合わせる形でセネカの理論は構築されている。Cf. Hammer 2014: Ch. 6.
- (20) 最もリアリスティックな読み方ではそのようになるが、ここではもう一つ別の宗教的伝統が絡んでいるように見える。ローマ人にとって神々とは、元來人格的な存在ではなく、意志をもった何らかの力のようなものであり、その意向が「神威 (numen)」として具体的な現象を介して顕現するとされた (湊 1991: 70)。
- (21) 『倫理書簡集』のうち倫理学の核心的教説を述べた書簡 95 でも、次のように言われている。「さて、次の問題は、人間とどう関わり合うべきかだ。[...] 人の血は流さぬように、と言おうか。役に立つべき相手に害を加えないなどとは、何とささやかなことか。[...] 君が今見ている神々のことも人間のことも含めたこのいっさいは一つのものだ。私たちは巨大な一つの身体の一部だ。[...] 私たちは互いに共同しよう。(共同すべく) 生まれたのだから。私たちの共同社会は、石組みの迫持ち (アーチ構造) にそっくりだ。迫持ちは石同士が互いに支え合わぬかぎり

崩れ落ちてしまうが、まさにそれゆえにこそ保持されているのだから。」(Ep. 95.51-53) ストア派の宇宙論に忠実に考えるならば、一見独立して見える個人も、宇宙的観点からは単なるプネウマの結節点に過ぎず、独立などしてはいないという指摘と受けとめてよいだろう。ここでは、個人という身体→共同体という身体→宇宙という身体と、三つの有機体の相似的関係が示されている。

- (22) コンスタンティヌス大帝治下で活躍した教父エウセビオスは、『コンスタンティヌスの生涯』において、神の忠実なるしもべ、神意の執行者というセネカと同様の枠組みでコンスタンティヌスを賞賛している。Cf. 弓削 1964: 503.
- (23) ここで言われている「当然の罰」とは、おそらく実定法に基づく罰であり、これが不適切である場合には摂理の側に立って裁定を補正することになる。クリュシッポスによれば、賢者は許すということを知らない (DL 123)。これは、賢者がすべてを摂理 (自然法) に即して認識しているからであり、賢者の裁定には修正の必要が無いからであろう。セネカもこの主張に従いながら、自然法の観点から見て必要な罰を怠ることが許しであり、実定法を自然法に合わせて矯正することを寛恕と捉えていると解釈すべきである。
- (24) 書簡 95 では、次のように言われている。「自然は私たちを血を分けた親族として生んだ、同じ起源から同じ世界へと生み出したのだから。この自然が私たちに相互の愛を植えつけ、社会的な存在にした」(Ep. 95.52)。この人間本性への反省が、あたかも自分自身のように罪人を労るという態度の一応の背景にある。この箇所は註 (21) で引いた部分の一節であるため、この人間本性の理解をさらに掘り下げると、宇宙の有機的統一が根拠であるということになる。
- (25) 「神々が自分に対してとってほしいと思う態度を、みずからが市民たちに対してとることです。さて、そこで、神々が我々の罪や過ちに対して容赦のない態度を示し、われわれを絶滅に至らしめるまで敵意を持ち続けることが望ましいでしょうか」(Clem. 1.7.1)。同じく書簡 95 では次のように言われている。「あるべき神の観念を理性で把握しなければならない、つまり、すべてを所有し、すべてを与え、無償で恩恵を与える存在だということを。神々が恩恵を受ける理由は何だろうか。自然本性だ。神々は害することを望まないと考える人は間違っている。害することができないのだ。不正を受けることも行うこともできない。実際、加害と被害はつながっている。かの最高にして最美の自然は、およそ危害を受けぬようにしたすべての存在を、危害を加える存在ともしなかった。神々への尊崇の第一歩は、神々を信じることだ。次に、神々の尊厳を認めること、それなしには尊厳もありえぬ神々の善性を認めることだ。神々とは世界を統治し、全宇宙をその力で制御し、時には個々の人間にも配慮しつつ人類の保護にあたる存在だと知ることだ。神々は悪を与えることももつこともない。だが、ある人々を懲らしめ、抑制し、償わせ、時には善きことに見せかけて処罰する。神々の好意を得たいと思うなら、善き人になりたまえ。神々の真似をすれば、十分に尊崇することになる」(Ep. 95.48-50)

## 文献

※ セネカからの引用は、原則として岩波書店刊の『セネカ哲学全集』の既訳に従ったが、必要に応じて改変した部分がある。

※ 古典からの引用にあたり、出典は以下の略号で本文中に表示した。

Apoc. = Apocolocyntosis.

BV = De Brevitate Vitae.

Clem. = De Clementia.

DL = Diogenes Laertii Vitae Philosophorum.

Ep. = Ad Lucilium Epistulae Morales.

Ot. = De Otio.

Polyb. = Ad Polybium De Consolatione.

SCPP = Senatus Consultum de Cn. Pisone Patre.

Braund, S. (2009) *Seneca, De Clementia*. Oxford University Press.

Cizek, E. (1982) *Néron*. Fayard.

Champlin, E. (2003) *Nero*. Harvard University Press.

Cole, S. (2013) *Cicero and the Rise of Deification at Rome*. Cambridge University Press.

Cooley, A.E. (2023) *The Senatus Consultum de Cn. Pisone Patre: Text, Translation, and Commentary*. Cambridge University Press.

Dorandi, T. (2013) *Diogenes Laertius: Lives of Eminent Philosophers*. Cambridge University Press.

- Drinkwater, J.F. (2023) *Nero: Emperor and Court*. Cambridge University Press.
- Eden, P. T. (1984) *Seneca: Apocolocyntosis*. Cambridge University Press.
- Griffin, M.T. (1992) *Seneca: A Philosopher in Politics*. Oxford University Press.
- Griffin, M.T. (2018) “Clementia after Caesar” in Balmaceda, C. (ed.) *Politics & Philosophy at Rome: Collected Paper*. Oxford University Press. 570-86.
- Grimal, P. (1978/1991) *Sénèque: ou la Conscience de l'Empire*. Fayard.
- Hammer, D. (2014) *Roman Political Thought: From Cicero to Augustine*. Cambridge University Press.
- Hannah, R., Magli, G., & Palmieri, A. (2016) “Nero's "Solar" Kingship and the Architecture of the Domus Aurea” in *Numen*. vol. 63-5%. 511-524.
- Ker, J. (2009) “Outside and Inside: Senecan Strategies” in Dominik, W. J., Garthwaite, J. Roche, P. A. (eds.) *Writing Politics in Imperial Rome*. Brill. 249-271.
- Nussbaum, M.C. (2010) “The Pumpkinification of Claudius the God” in *Seneca: Anger, Mercy, Revenge*. Chicago University Press. 195-236.
- Reynolds, L. D. (1965) *L. Annaei Senecae Ad Lucilium Epistulae Morales*. vol. 1, 2.
- (1977) *L. Annaei Senecae Dialogorum Libri Duodecim*. Oxford University Press.
- Rüfner, T. (2016) “Imperial *Cognitio* Process” in du Plessis, P. J., Ando, C. & Tuori, K. (eds.) *The Oxford Handbook of Roman Law and Society*. Oxford University Press. 257-69.
- Scofield, M. (1999) *The Stoic Idea of The City*. University of Chicago Press.
- Zanker (1989) *The Power of the Images in the Age of Augustus*. University of Michigan Press.
- Zeller, E. (1923) *Die Philosophie der Griechen in ihrer Geschichtlichen Entwicklung*. Leipzig: O. R. Reisland. 3. Teil 1. Abteilung.
- エウセビオス (2004) 『コンスタンティヌスの生涯』 秦剛平訳、京都大学学術出版会。
- 大西英文 (2006) 『アポコロキュントーシス』 解説 (『セネカ哲学全集 4』 所収)、岩波書店。455-64 頁。
- 川本愛 (2019) 『コスモポリタニズムの起源：初期ストア派の政治哲学』 京都大学学術出版会。
- 中西捷渡 (2020) 「セネカの寛恕論：総合的な徳としての *clementia*」 『倫理学研究』 26 号、24-48 頁。
- ヘーゲル、G. W. F. (1992) 『哲学史講義 中巻』 長谷川宏訳、河出書房新社。
- 湊明子 (1991) 「ローマ帝国における「皇帝礼拝」と「皇帝崇拜」：皇帝の神格化をめぐる」 『東京基督教大学紀要：キリスト教と世界』 1 号、61-75 頁。
- 弓削達 (1964) 『ローマ帝国の国家と社会』 岩波書店。
- (1984) 『ローマ皇帝礼拝とキリスト教徒迫害』 日本キリスト教団出版局。
- ルーカース (2012) 『内乱：パルサリア (上)』 大西英文訳、岩波書店。